



Ryan
Wigglesworth



Lionel
Bringuier



Santtu-Matias
Rouvali



Daniele
Rustioni

ヨーロッパで躍進中の 30代の指揮者たち

後藤菜穂子 (音楽ライター)
Text by Naoko Gotoh

9月の東京交響楽団に登場する2人の客演指揮者、英国人のライアン・ウィグルスワース(1979年生)とフランス人のリオネル・ブランギエ(1986年生)は、いずれも30代の気鋭のマエストロだ(前者は来日時には40歳を迎えているけれど)。本稿ではこの二人に加え、同じく30代の目下ヨーロッパで躍進中の指揮者たちについて見ていきたい。

一般に指揮者になるルートはいくつかあるが、主なものとして1)コンクールで優勝または入賞、2)歌劇場のコレパティートルを経る(例えばノット監督)、3)自らオーケストラを立ち上げてその経験と実績が認められる(例えばネゼ=セガン)、4)オーケストラ奏者から転向などが挙げられよう。

仏ニース生まれのブランギエはまさに第一のルートで、2005年に弱冠19歳でフランスのブザンソン国際指揮者コンクールに優勝、一躍注目を浴びた。ロサンゼルス・フィルのサロネンのアシスタント等を経て、2012年にチューリッヒ・トーンハレ管弦楽団の音楽監督に抜擢、4年間の任期中、フランスものや現代もの(サロネンの《Karawane》世界初演等)のレパートリーで高い評価を得た。

一方、指揮と作曲の二足のわらじを履くヨークシャー生まれのライアン・ウィグルスワース[注:東響への客演もあるマーク・ウィグルスワースとは親戚関係なし]は、英国のクラシックの男性音楽家に圧倒的に多いオックスブリッジ出身。オックスフォード大在学中に自作や20

ヨーロッパで躍進中の30代の指揮者たち

世紀の作品を演奏するためのアンサンブルを立ち上げて、のちにオペラのコレパティートルとしてさらに経験を積んだ。とりわけ現代オペラの指揮者としての能力は抜きん出ており、今年6月のオールドバラ音楽祭におけるトマス・ラルヒャーのオペラ《獵銃》の英国初演でも、歌手の呼吸を汲みつつ、ディテールに富んだ見事な指揮ぶりを発揮した。また2017年には自身の初オペラ《冬物語》も発表、今年のプロムスでは新作のピアノ協奏曲が初演された（独奏はM-A.アムラン）。

さて、彼らと同世代の注目の指揮者として7人をピックアップしてみた。すでに主要ポストに就いているのは、ヤクブ・フルシャ（バンベルク交響楽団首席）、ダニエーレ・ルスティオーニ（リヨン国立歌劇場首席）、ロビン・ティチャーティ（グラインドボーン歌劇場&ベルリン・ドイツ交響楽団音楽監督）、ミルガ・グラジニーテ＝ティラ（バーミンガム市交響楽団首席）、イスラエル人ラハヴ・シャニ（ロツテルダム・フィル首席）。そして最近俄然脚光を浴びているのが英国フィルハーモニア管の次期首席に任命されたサントゥ＝マティアス・ロウヴァリとフィンランド放送響次期首席に任命されたニコラス・コロンだ。

上記のうち、コンクール経由で頭角を現してきたのはシャニ。ドゥダメルを見出したことでも知られるバンベルク国際指揮者コンクールの2013年の優勝者だ。彼はピアノの名手でもあり、しばしば弾き振りもする。21世紀のマエストロにはこうした何かプラスαの能力も重視されるように思う。

2016年に東響にも登場しているルスティオーニはリヨン・オペラで2年目を終えたところ。彼はコレパティートルではないものの、オペラ指揮者としてロイヤル・オペラの研修所を経てパッパーノのアシスタントを3年務めた。ただ彼自身は「オペラ指揮者」と括られることを嫌い、シンフォニー・オーケストラの指揮にも力を入れたいとつねづね語っている。

一方、ドイツ圏の歌劇場でキャリアを積んで

きたのは、合唱指揮出身のグラジニーテ＝ティラだ。英国バーミンガム市響の首席指揮者としてすっかり定着し、地元の聴衆に愛されるキャラである。ネルソンスの後任という重責をまったく感じさせないダイナミズムと勢いをもち、独自のプログラミングも評判だ。

日本でもおなじみのフルシャは、都響の首席客演指揮者時代には充実した関係を築き、自らのレパートリーも拡げつつ、チェコ音楽の旗振り役として演奏機会の少ない作品を取り上げた。バンベルク響もチェコと縁の深いオーケストラだが、ノットの後任としてどのような路線を打ち出していくのか注目されている。

英国出身のティチャーティとコロンはペアで紹介したい。というのも、この二人はケンブリッジ大学の同期で、2004年にオーロラ・オーケストラという新しいコンセプトのグループを一緒に立ち上げた仲だからである。ティチャーティはやがて他での指揮活動が忙しくなってしまったため退任、彼がグラインドボーンやベルリンでキャリアを積んでいる間に、コロンがオーロラ管を今の地位まで引き上げてきた。因習にとらわれないストーリー性のあるプログラム、委嘱初演、教育活動、そして暗譜による交響曲の演奏などで文字通り既存のオーケストラのあり方に一石を投じてきた。そのコロンがこのたびフィンランド放送響の首席に抜擢されたのはレパートリーの広さやオープンな姿勢が評価されたからであろう。

他方、英国の名門フィルハーモニア管には若手の注目株ロウヴァリ（2012、2014に東響にも客演）が選ばれ、サロネンに継ぐ二代目のフィンランド人指揮者となった。実際、フィンランドは今や最大の指揮者（男女ともに）の輩出国と言っても過言ではない。

一昔前は30代の指揮者が主要楽団の首席ポストを持つのは珍しかったが、欧米ではむしろ聴衆の若返りや話題性を求めて、若手の指揮者、女性指揮者を起用する傾向にある。この世代の指揮者がこれからどのように自己を深め大成していくのか、応援しつつ見守りたい。